鷹事集

下

和書門 類
二七八七七 號
七六 函
六 架
二 冊

内閣文庫
和書 類
二七八七七 號
二 冊
一五四 函
一九 架

内閣文庫		
番號	和 27877	
冊數	2（ 2）	
函號	154	402

弟十一

一 鷹乃尾名鈴付并助乃尾鳴羽大石打小石打と云々

一 鈴付とハ鈴懸る所の尾を云也尾羽ねと云上乃尾なり鷹の尾也鈴付よりいれば尾と云也未装束の鷹の上尾と云之名鷹このみハ此尾をいふ之草取しておみ

ともいぬなりいつまでも鈴付尾ん事也

明治十六年購求

一 烏助と刀尾ともいふ又刀指尾ともいふ
一 殺（サツ）羽とも云大石打乃事なり
一 業引とも云ハ小石打の事なり
一 鈴付とも鈴さし以上揃来も尾のこと也
一 肯綮尾とも云 嶋尾乃事也
一 嶋羽式搦の尾とも以上なし業
一 十三尾乃名と云事尾ちかひの事也
一 十四尾の名と云ふ事尾とはいはさる也

一 尾付とハ鷹かねりしなえ之尾のさし
さき付乃さ紀ぬ有つし或ハ〱まくし
いつもこそ集の尾ともいふ尾つき志
くしそれなりとも尾付とも云ハ
割乃尾の[illegible]の付れ何文よ有つとく
如尾し送あるとも[illegible]
一 大尾形尾小尾形尾まて[illegible]尾形尾
鷲尾さきの尾志らし尾まて[illegible]尾

一　白尾鷹と云ハ尾魁之鷹乃白羽を纏
若鷹ハ
山口迄ハ　可有
一　續尾鷹と云ハ初ニ雉の雌乃尾ニ有
鳥の助として入の續ハ方の羽なりしこゝてあるハ

尾より逆生

右早ミて條之

尹水二

一 鶏乃羽の名一忘花よ上ハ七八枚をいふ
こを次ハかろくを次ハ四八をいふ

一 餌囊の毛 餌袋毛とも云 胸羽翠乃毛とも
云之胸の毛之白きをあるを鶺をもいふ

一 乳須草 又ハ 頬須をもいふ 鼻をのうへ
うつ羽 又ハ 雨覆毛 後毛を後坪を毛云又後

かしらの毛を後頭乃上にて是之帽毛といふ
毯をとらす無毛をとらく ことあるしらをと段
後毛の毛同じ之額の下もしらの根本
まづ毛の毛とを中云や

一 尾の毛なる尾の毛同じ之おし
かいの下乃ものゝ羽合のとしといふ之

一 頭さしのをしといふいふ綿毛の第ハのをし
かしてよせ

一剥毛大断のた云此物とも同しの之羽異
乃下殿ふかく取て之
一綾衣の毛赤乳糸青御の毛尾助乃もれ
すへも紙なしせ申越し
一呉根(りしハトり)のいそと帷なたをいはくの毛なり
一脇上(わうしさり)のそとは小脾のことなりあるれをく
しとす
一蝶羽とハ指節済り二所乃小羽也
一うち目綴とハ指綴のうへ二所にある蚊まり也
さくらとハ内へ具ふ此之服よあり爰ふ寺也
一伊羽乃そとを云ハ羽觜下を云 同事也へうし
羽乃羽つい合目のそのよう之長毛をしかとす
一菓指乃そも山ふふかくを同よう之黄々鳥の時分たる
のそふんとうへ小翦ねかて時ハ急ゟはのそて
いふ之大翦ねてゟ念ゟ布とはみて云清ゟ説の
を菓廻しからをとも いふ之頭乃ハいふ也

一 くろふとは山下乃毛の上之次の毛を
と山しをいふなり
一 せきれい毛とは荊をもつはらまへの毛と云
ふり羽乃毛也
一 羽澁（リサヒ）毛と云ハ七寸羽の根ニ生る小羽毛
いふなり
一 くまとは毛のもとをいふ兜のもとの下
ニ生たるをいふなり
一 苞毛とは毛の毛を云ハ内ニ生る毛をいふ也
一 樋乃毛とは腰袋ニ下羽添の毛
乃毛をいふなり
一 まけ毛と云ハ腰の根ニ生たる毛をいふや
一 くろてんの毛と云ハ燧（ヒウチ）羽の上の毛をいふ
一 六月も五月毛のこと目の上之わけの上の毛
一 鏡毛とも云ハ追羽ニある山下の毛乃毛さ
一 をとしとは源山ちかくの羽ニ似し

一 あやのもと云ハ羽くいの上乃毛なり

一 おもてをもと云所也

一 みけのともといふあり

一 むかうを尾と云は巣鷹の籠羽乃
性郎とも同をよく弱よとの事也

一 巣鷹乃初くそのもるとは先の雪を
とりよく染り材を切すよ尾花も尾もす
あまたいよ其好作もするを也いふなり

一 松原乃もと草よりそ見事く撰鷹の州
黄鷹の毛をも掛しあるをいふなり去年よ

一 残しあり雨白なるをいふ也秋季

一 比（ニカケ）捨とも云鶴（コタカ）乃黄鷹の附る尾の毛
乃毛の残る毛のもとをいふなり

一 うちはち済しと云ハ羽ほの事也

一 よけくる人の羽をいふ七尾羽の内二の
羽染ハ弓角利

第廿三

一玉虫の鷹といふハ小頭長く目より根
の方へ下りてそこより背にかけてかゝり
毛ハ總てまろくしてうきて尾ハ一枚有
まへにも見えて架ニ繋ぐ所にて居る事有
いつも其まゝ川に出て渡るには始の架

一鴫の雛の鷹といふハ玉虫の鷹より前
なるをよく居るを架にて同前

一まさりて鷹といふハ玉虫の鷹成とも
名ハとくさしかく尾と一枚ならでハ
又居るを飼ひかなり

一加居の鷹とハ上ハ玉虫同前架ニ
好居義也

一つよさの鷹といふハ架もなくさまにみ
[illegible]

[illegible]

一 三段之折の鷲といふハ先脇ニて
斑ありていかにも矢持之しこれとはかりて
力乃鷲也ちくさしつらく矢羽へよる
ましく尾と云ありき七枚小羽ゆへ
はらく降る尾し本黒の鷲也
一 三段の鷲といふハ大乃ちらく小羽か
うし武尾し本相なり
一 鷲乃本黒り三段之羽とこ本粉

三段をもて添小頭持尾て三段ハ嘴
根膝根ともうしきなり
一 鷲ハ力ゆゑとこそして上本ニ目の下
みもよくいへまたハ本縁の振り
そのきしし一段と過ぬく之鼻にそのあり
かもて嘴の根とかく見尾し
一 重（チヤウ）鷲の本力もよ目本之鼻そのあるい
羽イ かもて嘴の根より老段しをむ太子二羽より返し

一 又口あきたるを見せて調の響として之秘也し

一 枕の響とは者法一同又は之を者

一 へし見我外の響などいふ流り

一 行調の響とは一寸より二寸一分

一 りと一分いふてあく

一 乙調の響とは乙は両方より二同を開

一 其あら色し

一 響と尾とは中をしての上を見の裏より二まで

一 魚の目なしといふはものありて前

一 至し惣別生れはきぞなるに在矢

一 乃目に在旨なり

一 頬須(ヒゲ)といふは鼻の穴など云是を人とは云なるもの

一 中より生たる物形云之

一 毛髪といふは背根の事なり

一 あきりしといふは指の名へ甘どよりしてす

一 ねりしといふは指の裏にて魚わめの

横は生毛散毛をいふなり
一 ふそてしと云ハ指の上をうへより見れハ
ひうれしと云ハ根ろうすなり
一 ちこあしと云ハいつきのうちの之廣
幾りも古す深
一 まあしふくらと云ハうしろの小須のうちの
一 脛と云ハ寸珠の長なり
一 うハうろしをせかう大うし爪のうちの

一 䑓掃し脛のうへ之䑓毛を云䑓最をいふ
一 脚對とハ股のうへあきすくたいふ
廣きハ紙よりしも十すくなし
一 羽もともと云脚苔の上をいふ也
一 眼門といふハ鴻のうへと云之眦門といふハ廣（マヒサシ）を云
なり又鴻のうへハ紙にてめつてうけたを云之
一 上下といふハそのもえの小顎の上なり
一 うら骨といふハ羽をそもの之ひ骨鳴ハ骨を

一つまたと云ハ下をとうまをこゝを以て取り、
又内をおさへ以て来なり
一かゝりかへりといふハつはさの内の方なり
肩しきを彼を以てなり
一呀(ガ)つしといふハ頷(ヲトガイ)のしたへくゝりてとんとおり
一小臂とハ股の下を以てなり
一指名懸爪ハ指にあり　指の爪ハおれ爪
を節といふの爪と云内の方にあり

指をいふや鳥居をとるかうみをゝ云中の
指をと云之ハ子をとりきりけれと云そこの
指をいふなり
一方れ口
一十二類の支大鷹鷂小鷹鷂齋鷂鷂両ゝ
蠻(サニ口)子鷂　とひ鷂　雄鷂　鵙鷂　鳥さ乃は
みさこ鷂　乃きんそ鷂　打ち鷂　いそ
一又方乃とらへのこと

一あかとる人無行かいの事悪太郎之おとり事

一おちとる人此事ゆへおちる事

一そちりこる人松とし大

一こし海しる之内書

一かりとる人所事

一月小大月て悪日いむ日乃事

正月 辰日

二月 丑日

三月 戌日

四月 未日

五月 卯日

六月 子日

七月 酉日

八月 午日

九月

十月 亥日

十一月申日

十二月巳日

右日ハ宮中日也一生忌日年末酉此

日ハ取て云あ本命年月ノ年月

并為忌日也

第廿五

一 鷹乃尾也衣のまゝ角鷹を據も一尺

八九寸有りても一かの本ハ六七寸まて

一 兄鷂（ハイタカ コノリ）雀鷂（サシリ）乃衣ハ一尺二三寸有りて一

鶴とハ一乙申也小鷹ともいふ小く寸廣きの

只生れ鷹は黄文淡黄乗一

一 茶鷹乃衣十済以来白鶴とこの用

一 諸鶴の上を鶴ハ紫文紅梅乃猶なる也

第廿六

一 鋪板乃寸法の事 兄鷹鷂鷹の頭

長 一尺二寸 廣さ九寸也

一凡鷂鷹乃餌板の寸法長は九寸廣
さ六寸なり餌板木ハ大鷹小鷹
たり栗乃木を七寸

一餌板をつる板を餌挽板と云
大小たり同しもの也

一餌はしハ長さもの縄を用へし
しるしありて餌袋入之餌筒を
ふ物小さくして竹にてこしらへこのことくして
餌を入之餌ふくろにてもかるしても用也

一鷹揚枝と云事ハ鷹に参らせ付に
一本の揚枝をもつて成貴人の御前にて
てそ能くはからひて口餌をつけて
参らせ鷹に喰はすへし

第廿七

一鷹屋より人に太刀もちて候儀或は
太刀預りて鷹師乃太刀へ太刀

乃石衛門を以て御袋の下へ御し
入の様にして出させ請取りて
鞁を御手にいたして太刀を取りて其まゝ
をいたしては文字方を取りて返しや
一 聟座敷へ入時湯をこほしもらは
箱紙箱に入てこほし入るゝ
出来候聟師当を請取時半人を
なれは尾なりとも又し 我聟の文字

人の聟ならしも紫氏とく右よりは
尾なりおろして右なり。
一 聟師に小袖を出して相角聟の時は袖
を持する者は太刀方へ此枚に置きて
きれへなりして二月に出してたれまて
へくおもて居しさうかへりまへくて尽
袖乃むきを杉枝の間にや聟座
なれは小袖を出して其まゝをくく

なくして鷹をすゑすは其のまゝ据置へし

一見鷹を据る人は小袖出すへし小袖を
小袖持たる者の左之袖に名を候
さしくはへして二月に持事左の手に置く
てのはら摺の時は度々る并小袖の折
様は同し角鷹の時は女房衆よ
りは下小袖の折様にたゝみ様して事也

一見鶴乃時ハ様のことし　鷺の時ハ母鷹
のことし　鶺鴒の時も小袖はさみ候も
大小のことし

寸尺八

一鷹に料紙を添へて出す事　結目料の下へさし候時
は鷹をとまらせて料の下よりて鷹の目
をとめ候て両方の目の内の黒眼内し撃
るは表目安とせよ黒眼寄て小一方
は大に一寸は小に切付る　又は白紙たり

もく／＼しつらへ候をなしおへし
一 鷹に隼前の出来したる事を何も鷹
をとらるなとゝ剥るへき大事
隼の出来ん事を心得すへからす一方
いよ〳〵大事一方より隼は据へかゝりて前
隼出来する時は試見をもつて前の出来
といふけうさいの下の毛をもつて剥之隼の
出来とは背のまれ毛をいふ也

鷹乃孤羽清ハ身の毛清めてこそ
もの背の上乃毛とハ斑文ある毛の事也
此毛を抜乃りしそれ以て取り
鷹を弱し薄（キタイ）浴（アヘス）却して云事有調すと
いふは鷹をしくしけしの上をかくハ
抱きて能く見るへし生して据ゑれ
は羽もつて逃て返しても逃しそても得す
まうる弱ハ然りして其二三月斗と癖と

網をはる時扨はなしへし網の投入手
といふなりといふハ次目を鷹をたかの
いふ事也この扱箇へはらせとし先は
細く葉二三寸中網てりへとする六
度侍る也上縄を一網毛とよら
云物へあとと云ふ二たたむくしなり縄を
まはす鷹始て心得て表生とすへし
第廿九

一 口の鷹をいふに手きて表のくゝ時の
事へ大小たゝり同し。
一 かたかへりと云ハ鳥屋を一ツ毛するを云
一 もろかへりと云ハ鳥屋を二ツ毛するを云
一 とろかへりと云ハ三ツ毛するを云
一 川毛する鷹を云なり
一 もろくのかへりと云ハ鳥屋を
四ツ毛するを云也

一 り坂くかへしの鷹すと云はとや
とみ主よの残 以乱判
一 ふるかへりと云ぞ 六川流 七つぞ
かへりまする代 以まずる
一 きぬかけ鷹とは紫えとは 姫
乙女の鷹をのりと云へこ 山かへりたいまと
一 山かへりと云うはかへりのはけと云也
一 菊山かへりと云いけるかへりの時をいふ之

一 尾上のかへりと云はこもりしかへりとも云也
一 みかへりかへりと云は五かへり六かへり
一 乃身をいふ多くのかへり 季 年かさねとは
野をもつぬ山に住まするを云 大小同
一 贄鷹 御賞の鷹なりと云 奉神鷹之
一 一双とは大と小とをいふなり
一 白向の鷹といふは橋の事や
一 更(ツカ)おり鷹しかへりといふは参ノ鷹の

名也
一 蒼鷹 海東青（鶻ニアリ） 殺乳（サツキ）（八ツ鷹之）題肩 中の云
一 良（リヤウ）鷹 後（兄鷹之）鷹 子（月）鷹 娘（月）鷹 乃
異名之 しかし紀鷹を小ぬるしと云ハ若
鷹と同ニ名之 青（セイ）殻（コウ）（兄鷹異名之）
一 更相と云ハ 大鷹の異名なり 一 弄鷹（鶯兄鷹ヲ云）
一 観鴟（隼ノ異名） 晨風（不出ノ異名） 弟鶴（隼ノ大ノ異名） 兄鶻（日）
一 後鶻 後風 鳳 後 鷹隼鶻前若隼の異名之（小ノ異名）

一 菟（コノミ）とハ 紫絶乃異名なり
一 黄腕 年の鷹の異名之 大小大
一 羅とハ 黄鷹乃綱ゆくものち
小てゝ ねゝろとハよう 山廻ハ綱ゆて
もの純 ししし 足とはいへ
しらへ 小足といふへし
一 合鴘 黄鷹 のり乃異名之
一 大雲児刺羽 鬼異名之 鷙 鷲 隼 鶻（コツ）

一 薩(サこい)隼鷂判羽を判羽衣判羽まてを
こ利羽也といふ事

一 脇鷹と云ハ鹿ゝるを以ぬ野鷹
といふハ替り居るをいふ也

一 そもゝゝ鷹と云事也希有にゝ鷹
とハ其同調之一段腹鷹のあとにい也

一 まえゝ本の鷹といふハ見るゝもてく

一 わらゝゝふ鷹の事をいふなり

一 白沢の鷹と云ハ年中使鳥し
易る鷹の事也

一 きれ鷹と云ハあきらかにと云事
同調之たとへとり名鷹のとり事

一 うとこしれ鷹といふハ隼ニ限る事
ある業此鳥ある所を知りこそあり

一 らまえま下ゝりたてれぬ所よ巣子育
ちてなるを様の花など一束結てとより

まへしうしかられハ其よ巣子離ろく
よ川と號くうい二歳まて使ひけると云之
一 奥ゆめて巣山の事也いふころ山せ
うそく衣なり接をさくはちよりたゝ加川より出
ハ尾ふそくうくあん是をせいろくり作ぬなよと
まさなるをと
三く白川也けれと
一 度專らと云巣山ハ甲斐也ふたく度專と
宇治乃宝號よ納りけれると七月七日

みさゝりし物の時ゑもとゝ付此鷹を鶚
振く巣をいくる子もらも其よりして
此巣の鶚をりし白川をしらと云之甲斐国
山中といふ所またに至て近江尾り
一 角鷹にかなぬ語ぬおゝ名をひまし
いか為振ぬなり
一 日向巣といふハ角鷹之
一 丹後巣といふは鶴なり
一

一 御位鷺といふは鵁鶄也

一 鷺子は鶏（こかと）丸とし云鷺首を鶏に似て生鷺く檳（わうわう）はとろまけける大行列大津浦なとく絡おし神への神谷津宮荒の池なく光とつよ鯉鮒をとるる一条院御無ろく鷺喚んて秋年は政杉人の絹之

奇白

有る泚乃鯉の巣鷺とらかなり

おそのをしらむなと府すらま

奇口十

一 鷺乃鶴の色いはり青はおもて赤あり之鵁らひ鶏白さとせをしいふ也

一 雉乃羽を青みおしそのをのこれをと白りなせていふなり

一 鵜の頸骨をぬきのりて毒山にては とおしなへていふなり

一 鷺の尾鶴何也の鳥りなくては汁のまなこに

鶉の籠を入たる根ハけの中へ吸口
を入ぬ心得へし
一 鶉の餌ハ粟をすり粉にして能〻
すこし乃摺をは切之
一 羽のいたミし時ハ餌を一つ乃揃ひを少し切
て羽毛を合せいたミて一ヶ所
一 捨菜を入る本のしきをしく置とき
ふりかけき水此ハいたミ餌のとき時節ニ
ともかくして餌て用鶉の飼と納し
一 明ケのハ夜をおへ夜の宗様の事をなく
とゞまるさへて上嘴をしてとまる明ケの
うハ夜ハ時節を七八月ところ日和見
そまてとらせける事のいたミ夜へ入る
一 雛を育てするに夜は小さいうちをせき
多紙を上ニあまり肯を置けハ中人
日暖なるの半人にて上ゲ黒きを一〻置え

縁骨とハ股の根よありとある
骨なとは常にみちて持つ之鷲毛馬ハ
用ゆく足ほこそ貴ハ不用く
第四十一
一 鷲山りして乃詞征事
一 野山と持くりて自花表子多とみお
まくみえてると云ハあわしと云之鷲師
此てしや云といふも付ありたり

一 遠山おちしとのハ野山みへく鳥乃まく
しよろとなく 旧事よ波く有へし
一 よきとむかしと云事ハ鷲のゐるを書く
遠ける代 いふなり 大鷲同く
一 渡りけよかゝ章しいふ事ハわひの草よ
おくまとて 出る見詞之西くの初也
の草なりし曲とし いふ義なり
一 野山みへく続の古と端く分しうたえとハ

ゆかりある名也といふなり

一 とらあるとこそのかは名の人しるの事なり

一 山のかしらくとはさうことにいふなれは

山の次とは清よりしこえさかる下七八九

に頭をは其名にし云文字ちつらくなとも云

一 又谷より二三のめ上をつまとしていふ之

一 とかり尾ろにかかりと云は山のそとろ云をそ

一 或に鮎のゆくとを附は鵜飼師は夷子元

よりみえ帰るを先へりと之

一 名乃足跡の辺をは其流ゆつらんといふなり

一 又は名乃清ふるゝをもしふなり

一 雪しけりてはかりしよりことといふ之鳥乃州はいは

山めくは山ろは麓せしをしをといふなり

一 跡せるはをとこふるなりていふて因示

獣山はめくり去ろてしたかうそのかかりて云

みれて長定谷見ちかくしそる梅と

一 いる義ハ道にて糸遊（イトユウ）して言ふに限りある之
雁乃渡より雌の記しるとよめるあり
記し□といふあり

一 雌の渡より雁乃記するとも云ふ事を云
雄乃渡よりも渡の雄ハかうてお
の雄乃記しるとも言ふたる□云ふ義

一 とても又も記ハ河□となし云雌の内なるへし

一 鳴鳥の木雄記すと城又雄乃記ハ也

一 城記しるとも下鳥の記きるしと云之
又雌乃必記す事あり下鳥といふハ雌
あり雌の記しるとも必あり

一 富士ハ日数十日也十日の内といふ事なと
一日二日山木海りて彼といふ山々して彼
と云也六日七日八日なとハ山をみて彼を
とそりの事ハ翅をつけてゐるあり

一 鳥を追出としたる西風吹きて遠方ん小鳥

乃麓といつくしき所をいふなり
ゝ高き木の下とは導師の下
なれは法後之鞴乃下ともいふなり
一 山乃おく檜の木のしけき所をいへは
すなはち山の奥乃かよひ路をいふなりけり
一 谷の戸をとさしてかよふなく
一 谷うちよみかねてしとは谷をゆく
一 峯をさしてみねのほりをいふなり

一 山ふかくの詞になりぬれはおく山の
あるかきりをまつらしいふなり
一 けふをも云は山をとりおくなり 余山
一 へ猶るは乃詞也
一 うちはなきとも云は導師はつかしの山
一 りかりて書写元許をうけます之
一 たて始まりとては云をは導にいまはしき
法師のけや

一 草人といふは鶴をとらせしといふなり

一 雉をかんにうちとりしそのハ鳥を追落てよふ木居に居かゝりて侍しまかりてある事をいふなり

一 次鶴しハそのハ鶴鳥を追切と後鶴あとより又いそく掻をいふなり

一 記してのまゝの鳥とは落をみまよたふ居しそれかんよしといふなり

一 むかしといふハ鳥を一つも捉ける事なくむかしをくこしるをいふへし

一 とこめれ鶴しとハ鳥を落て追て追おとして木に居るを追切する鶴と人の見るまゝに中切えみて追切する鶴をとりていれしとこめ事の鶴をしてみて大とぶゝ鳥え居てのくかへ給ふなり

一 松枝にまつはぬ河の木よりありと云山葉なり

一 羽をならべてつかふ所に鳥を返こし
めくのまゝなり
一 あさほしといふは鷹の薦を
つかふやうに鷹鳥をとらせたるを
一 もとり羽といふはむかふ鳥に拾ひて
羽をとりかへし投事とも文羽をとりかへす所
一 返こしとはあふりすゝみてそれをとり
羽かへしとはふせりて此をおりしたるを云

一 はなれ鳥しといふ所は人にえゝてとるをいふ
かへつまれ鳥をとらへてとらせたるを云
一 拾ひりしといふは人のたゝんかけたる鳥を所云
とらへて捨ることのとらへてとる所
一 とりつけとんびしといふは鷹十村にて鳥
を追ていかたる所しるなり
一 こらうむとこはは鷹鳥をみなにしもく
ありしてれれし草のうちに所は投するをいふ

一 草紙とうとしいふハ鳥子を返してめくく
とりてくすり紙いふなり

一 鳥しらくと云ハ鳥子の第に入をえんの
ふりをいふ又鶴鳥を返てぬる紙
えん失へとめりしらとえん失とふぬ

一 草摂としいふ事ハ草きいふるく鳥紙
草へ入をもして摂くる紙いふなり

一 祢鶴鳥と云の前ふくく鳥を摂のを云ゐ

一 うもき羽特毛羽因細之鶴鳥をも返てく
りて掌さいを鳥の汁紙ふさとあるゐ
ふはめて掌さふ紙りわすそ纐くとせ
めおさしおる羽之まきは鳥をはうなれし
しるは羽を特さり鳥を立ちあとし

一 志紙羽ゐり特毛は尻之斉り
鳥とくさ鳥は小ゐ御し掌こなり紙

一 さそりくく云ゐる鶴鳥のえを文羽

一　さゝ呼と云ハ雑ニ而限る事之義ニ
呼紙ニ而書り四季ニ見る所ニ而候
一　きよりとんと云ハ鳥の名也花ゟ
前紙ニ而ふき利
一　おちうへりの羽と云ハむしよ鳥り合也
てちうひりと羽りと云ハ化返りあり
一　おとしてハ草ニ而力ありて専紙ニ而書り
一　山どうるみか山ちり山とも山ぶきといふハ同

洞之ちり山と云ハ春季也　一夏之ハ雑也
うすしこうすこへ帰る洞ちり山ゟよと云ゑ
一　入山しと云事ハ桜奥へかへ帰るとのをあり
一　樗蒲栗林寺菩提寺をしと云ハ以
きを同事之春季也　一折ニ二つ以也
一　こ雑と云ハ雑也よく根なと以書り
一　おもてけニ花入と云ハ本季也花本此中
入花入中ニと云也

一 禄しまるといふハ鷹ゑを返切山の称ハ
かしらにとまる事也

一 拵ひしとおきて取しとて鷹の
ほそり紀をいふなり

一 こいてなるといふハ鷹師の太刀なり
鳥の紀をのこし鷹前にかくいふなり

一 鷹師乃鳥を☐してしるといふ也とぞ
たるをいふ也 一 鷹師に限るなり

一 囲といふハ山なとにて鳥のある二方こそ三方
そへ人ハ元まハしく鳥をかこふるに
と二方あけるをかこむといふなり

一 餌鷹精出する鳥といふハ鳥のうへ
鷹のあかりて飛羽をいふとも弐ツあり

一 かりあち羽りせもあしといふなり

一 けつめあるといふハ足なかより鳥紀あるをいふ

一 もん鳥といふハ雉の来一度もこすを本記

乃事也

一 ゑとり羽と云ハゑとり羽と同し事也

一 朱けき羽と云ハ赤く山水くの羽之上の山
みそくハ岩波しの羽を飛して云也

一 雪吹めるゆへハ鳥の岩くり
草原にてきくまへ上るをいふ也

一 紀をハ河して鳥と云ハ紀ある
山へ又飛かへるをいふなり

一 鷹のとふそふてかへりしと云ハ鷹のそらを
近ひ草きハみくく鷹濡れて上る羽となる
る花く鳥の寂草をみて寂ゆるを云

一 さかそしと云羽そこふそしと云羽も同事
なり草歩ハ水くあるゐ鳥ははなれ
て寂かくる羽なり

一 雉のひとり立と云事ハ鳥の立そ壁山
みるたつ鳥の飛上る所いふなり

一　鳥車とハ人ハ山中しかく鷹の名也
数々とりとめたるをこそ鳥車
とりのかけとそ申へし

一　せきしとハかくりしニハ鷹鳥をとこそかく
遊へはとくとく鷹る事ハ西鷹のあ
さかる羽をとり上鷹をさるといふ也

一　のけ羽とハ尾筆のうしろ遊ひ付鳥物にあり
て鷹をと遊ひ羽をうくへし捉とのかね羽

おとこいふなり

第四十二

一　角鷹ハそも橋元に草にても尤鳥
とめつるをはりもとい尾し

一　あしをむすひとハみうハかけ毎なく
尊く入事ハ紙にて遊物のうちや

一　ゆきまちとしといふハ内まく掲し
胴をいふなり

一 さし入鞠を鞠といふはまるく鞠をさし之

一 客の鞠といふは結合まゐりてとり
かはされは分にまはる鞠をうけ申し

一 取て出し数を遣ところいふ之大鞠同之

一 揚せきひろきせりいふに揚せきはかる

一 ころしるをしていふなり

一 おりむたるといふ事鞠師を見知る候之

一 節をとる為すること為鶴なし投候よ

一 足弱て押同くものをいふなり
小常には相くもとせまいらせとも候はし

一 かくまりたゝ入てあかるに鞠をまゐらす
鞠を飛弱て足もとまらぬちかきを
出るを鞠は付上る相紙なるし

一 前かゝりて投るをいふて投手もとし之

一 する祢ありしいふに掌ある事

一 うらつかひといふ事は鞠をとることも人ある拵る

事なとはあひくらへ鷹の名なくなきにこえ
ありて本の木の名にかかる所といふなり

一 かりくらしきとハ鳥を追落して鳥
をとらすれハ鷹師たちけて鳥をとるを
をとる鷹のかく鷹師の上へもとしすゑるを云

一 架玉とハ拵しといふハ架より鷹をいさし
みなみの縫なる所にもとをいふなり

一 荒鷹とといふハ荒鷹の薬の肉むしるを

きのよき付山かくしこらしかへんとする所
に引振りしよるをいふなり

一 あひのあをとらしと云ハ本名をとり
ての所いふ

一 こ行ちをとらへしといふハ名をと援しても
むしる所のかたちいふなり

一 こときつ鶴しと云ハ兄鷹角鷹の名を
追落して居木もとに大きくとり合覚て

引鷹木かりはよく木の本のうすき所へ
鳥をもてこしへ落て見れは犬よく
見えて流れの辺にて引鷹木より
かくて犬の見えもなく犬の引事つまつく
引きとし残しかるへしといふなり
一 火おとしの鷹とはいふ鞍にこめて晴居
木の下にて火を焼(タキ)て鷹をあたゝめるを云
あす縫は鞍にこめおかるへし思ふ心ある故

一 まくら鷹とは鷹をかへりにひらかぬとき之
たまさかにとらは鳥尾ゆるしぬると引出
取之所の枝木の枝をすゑて云ふ之
て引きよせて輪きをとかぬ
しはるはたえてこそはやいふなり
一 青鷹とはいふ掛接所鷹よ限あり
一 諱なり小鷹よはいひけるなり
一 御手の鍛とは所へ渡る水手鷹

一 乃新撰なと見へて付あり候之
又かくして狩鷹ちうしいふ鷹狩の付のうち之
一 山うつりの鶉なと細かく執しられ
ともありなしい來て云
一 山鳥のめん鳥狩ふりてめん鳥しいふ
一 つんと云て有たるし云ハ鶉と云付る之押
一 桜せまりして云ハぬけのすゝをいふ也
一 一よりを一かり桜あるも云之大小有
一 小鷹とゆし云ハ捧角鷹のちいさき也小
鳥をとらへの月小也して捉く鷹の鷹之
い鶉はし之めくめる也小鷹
一 あり鳥と云ハあひ鶏をかりし月からう
一 めゝしの沢と云ハ沢子ありとかいふ之
一 條の沢ふともして鶴のみを捉ゆり
一 しもとゆふゆり
一 あやしれ網もひ網にまし捉の付禄衣

一 垂して用をいふなり

一 鐙のことわりを見え 左足 呼トモハニシルト云字

一 鐙鳥を抜てしめたると抜てしめたる左足也

いきのこしなしとことゝて とりとひかる銭

一 又は流くるりとも くしや書るをいふなり

一 流鳥の背に射て 前手にもとをり帯えて

鳥走はやきにて まきくしめくいふ合せんて

一 鐙はとあひ 挿をしてとりゆふさとて河

もち鐙をはつる事をいふなり

一 定挽といふは追手をもとひくる也

挽くるをいふなり

一 中挽といふは毛花ちらさずまり挽に

挽くと等り

一 軒相手つきに鐙といふは帯してし

ゆるといふ 大内乃流捕の前は車ふく

鐙は廣縁よりさそて東の尾乃相を

一 めくはるしといふへし朝顔はしけなり
水のそこへ遊ぶ事上也 蛙といへる
ゆく〳〵みな絶えたる人をこ相也といふなり
一 水の上みゆく根本なるとは名残に評に
鶯といふなり
一 氷のあたりてこりかたまり筆なりそこそ
つるふしの事 根源本なるとも ちのら
鶯ともいふなり

一 水のなみ雨まへ草なりて珠玉流に
霰とは力第也といふなり
一 鶯みちくらまするを如と地人
雑れくるしいふなり
一 志ふ鶯しいふは鶯去年りて一声
せり元朝へ鶯とこいふ也
一 鶯の音をば時は若くれ候時分や鶯て
つ時をいふ也那季

一 はゝそて見事にといふはみよくそろひたる
えたまさりそへし根といふ
一 田の神し鶉なとも根あるとも飛落めて
根木飛入根木ありけれ
一 と記翔しこのはの葉の蔭に退後
志鯛を一度二度翔て退るなり
一 鳥の右を下へなりて飛さるをは右
羽まけといふ左を下へなりたるはかへ

飛まわるとは木羽みつきあわしもく
一 腹のそのめいをとりもちぬ鶉をといふ腹をとしに
とすることいふなり
一 かいこ羽といふは羽をあはせて尾の
子の並羽の形くもなるなり
一 をりと鵰もの鷺羽なりといひと云
いかにつらきをいふなり何年の初
鷺出るをいふなり

一 しん〳〵諸忌んハ合同せ

一 長くあらしこハ気を根さる時すく
よるなり此の時は不可也

一 河しとらし以て土のうへちいはほ天面気を
めぐりぬかるをさうしとかして以て奉り

一 大雨なしみかゝるをを取とり大
よひく生気以て於なり

る銭をよ却しすと以て奉り

一 きりたらを葛ハ碧を志行なり
ましくるつき出来時分の事也

一 かゝ希を小本なせし以て在り

一 田あらし以略して論の事也

一 年に條々條の其名なり判

一 碧自をもちかゝし以てハ同此を
此了を銭以かなり

一 うんらいのさう傳といふハいうて なり

一 尾のさき見えのこと なり

一 さしていえしてハ尾指の上の事をいふ事

一 そうろうをもめくるしにはしてたいふなり

一 うんらいのくるりといふハかしらより

一 羽先ゆかくのゑのなり

一 鷹の行揺と見ていしもて云流石之条敵

流まいいの事只行揺しと云之おもてあると云なり

一 鷹がりといふハ貴の詞之秋冬より

隼を胴に鷹據とつくりたる物なり

一 鷹すゑといふ事ハ鳥屋をとく胴并

狩又はいふ事とも二度もしくハ千鳥

一 鷹しきりといふなり

一 旅くるの事とハ婦ハ鳥屋残胴

付そをよく鷹して鳥屋の内なり

一 若鷹ハ羽もしく小さきを旅くるの事と云之

一 ひらき羽とも連羽折といふ也

一 前より鷹を合て取かけ足をとる

一 やかたは一尺拵といふなり

一 後より鷹を合るをは袖や物をと云之

一 あしの〜の鳥かへるハ左右の足雉の頸之

一 こつちの跡をこそ足乃跡たり

一 又云との事也いふなり

一 まつ池にかゝ候ところ池辺へ合ときも合て

一 鷹使をいふなり

一 鶴乃耳といふは川乃事をいふ和

一 云事は耳といふは二川の事なり

一 左右を一面みてへるといふは鷹

云初子の入羽肥先る事はいふ也

一 鷹乃足をせうにわかつ九ゝ事こそあれハ

一 鶴鴨返羽沖鳥鴨足伊中鷹のかたへ

一 山こいりとく同事なり

一 鳥を戻みて指て戻る鳥といひ
さし返り指しともいふなり
一 鷂の才くゝりを出すと才布とす
するとはいふなり
一 鶉餌を肉に指まつ指とこそ肉より指
餌と二ツとしこそをしとも書る紙といふ也
指るは鶉るに一ツとしてさとさねなといふ也
一 山おろしといふは口つよきへなしと見聞之

率をましく御あまき人あき紙といふ
一 しいふ二こゑともいふは羽くきの物し
此を手紙といふなり
一 餌かへしといふは胴鳥のまへ
一 思つくしとは暮こさしある思餌の名之
一 返りしてつかしといふはえしともとる
とゝりて指る事をいふなり
餌うきを餌とわる事餌をひきるをいふ之

一 毛附とハ一尾のみせ羽中結を
このぬといふなり

一 しらこ鷂とハ山鳥にも有鷂の事也

一 うね出しへとハ山筆毛有り鷂の事なり

一 初しほ鷂とハ旅代さしてはじめてのを云

一 巣鷂とハ雉を十日程とをいふなり

一 みへかへりといふハ多く雛へ其出鷂

一 とつけへとハいふなり

一 ふいごまへとハいふハ破の多分なり
多かりけるを尤くなりくすこもよと云

一 網懸鷂とハ山にて中投とハいふなり

一 背をとる武志ていふとハ元也

一 鳥形投旅寝をいふ

一 託かけ流る間多也

弟四十之

一 鷂(コノリ)小鷹羽投ぬしるしとハ鳥しるし之

一 ゑしみんとハいふハひとりにて彼すまへ
ゐもかりにも以ハなり

一 さいさいすりはをもしへ事をゆるしたまふ
しへ上とつるき鷹しいふをそく

一 上手代ありさい鷹匠といふへし
しけ鷹しさうたいこるのよすく彼時のまへ

一 大きさ九寸そ出るとも紙そろへて

一 雨ふ鷹井こうそ鳥もとも出るよ

一 鷹 鷹前より来りいふ鷹師鷹の席る
ゆめてつる代鷹そひらくおて草我の合
て先大将よ鷹匠して次第に将を
ちいさく家またハ鷹家法の様をいふ
川之桜へしこち村櫻に揃りる僧なる事を
ぬいろく鷹のかるてなつきハ一ろ上へまち
わりにとも知之ぬかりぬハあ年紀
ととしらうしく鷹乃頂へよりうけ鷹下

かこみゝの上ニ有しをあかく色をさしは鷺
たゝや冥東みハ勝をとるまてあかく大の
まつまきハ鷺ハ名をかハつけよはし
鶉のおちかと帰ぞ宗の大帰ものゝへに
偏を押への付ての取まつるのみ残されて候
ある竜振にすゝめ之鷺ハ小さいとち
すゝれよ使ゟ口傳ありして ハ雄 子之

一 鶉を追ところ所へたと入とも其渡の鶉ハ
之をして引の鶉乃起ゆるをとけ
あひの鶉ゟ起ゆる也と心得也

一 とりこゝに之ハも与未来をといふ之
鶉とつましと云ハ草藏にゐるすしの多

一 まてなり考もちかつ飛てく起こ鶉

一 かゝわりものかけしいふなり

一 あちりとゝ之ハ小鷺の事之大鷺其子
ちゝと日向之小鷺みハ妻子とくいめすし

わてこそ了かりしといふ也し

一 こわりと云ハせ命に結る鳥の事也

一 小鷹なる鶴、ハ捉て鷹師の前へ出
まるを指向しいふなり

一 小鷹鳥をよく捕まへて捉しといふ也
追鳥取てあちやくしいちかしてけり
をとり伸しひろく飛しれるをいふ

一 毛網しといふ鶉ありたてはそれも無き也を
りハ之生しるとはそれ網しくハ云ふ鷹了
とうふ撒敎しあるをいふなり

一 言うしぶ草しいふハ鶉の草小屋を
ふんもしまかるをいふなり雛そ云之未成

一 内衣（コロモ）といふ鶉をみえしる時いふて

一 屋をと鷹しといいましく屋をてかきます

一 うゝ入の時のみなり

一 屋を肉みせ捉いるといいちやくしとれを

云組鷂鷹乃付の事也

一 りちみけと云ハ小鷹の鳥をとつらまへ

一 小鷹を草よりころはかし上るをはかしめ
かしこめと云ハよくよむへし

一 鳥をとりてつかへるにしへあるしハかゝ見
かしこまりておもひくわかるかゝるへし

一 手よりそれ羽と云ハ向鳥乃摧（セツ）ちりて（ウケ）て羽を
なる錬し追てりと云へ小鷹同之角鷹ハく

云へうしハ橋角鷹つかひてとりとり
羽をたことより羽おとしはかたり。

一 鮟鹿といふはさもしと云ハ鹿をとてまるかみなと云
鮟鹿をといふハ世鹿捉るなとしいよかり
もと鹿を鹿をとりてきらせさねかせ

一 あるくぬきまあしよし ハよハ鶉を追鹿し

一 出る所へ大をへ入たりまいひとへて
ふとせらるとしハ来てさてあるくぬきまきまて
云へし

一 鞁あふりとこそのハ追てみるく居ふ不
へ見てよくかりとりうちへ中ることなく
よる事歟鞁ハかりすることハいふなし之
かくるしハ鷹乃ふくもんるしハ小鳥
かいよへうけ緋の事也
一 鷹と人のなかにて我に合まると
はよこあひのうくつみ猶つうしいへく
一 緋緒御しこハ結合あつまり文くとり

くぬ付せてる鳥をとなす事出したら御
まるといふなり揚角あるの宿り鳥御
と同前也張りハ緋袋御なり
一 稲り雲雀りハ云そり帽子つて同類之
一 かいつめの鷹ハ鳩もつの草小書と云之
一 鷹乃一何ようをいうし鷹と云一本より
一 二何よりそむ語らくうしいふなり
第四十四

一 諸鳥の羽音の事

一 鷹の羽とハ扇めいて起あるといふ之

一 雉の雄ハ高く打消て起とは
小判めきて起といふなり

一 雌ハつよき羽数多起とハ知る
しくと起といふなり

一 鴨の起しやうハ三川して起しといふへし

一 鴫の起とは羽付くて起しといふへし

一 鶉のとりつけ起附ハ一番より羽をハ
さへつし起と云後ハ起をひりと云也

一 雲雀乃起をハひりくとして起といふへく
第四十五

一 鶏に對して事難し捕みに用し
品品 嚚 日品 喦 品品 急々如律令

右是を柳小書て鷲持ハ地に付懐ニ
の持へし

一 野干の法の誦文之事　所命日天子
本地観世音為渡衆生故普照四天
下一称一礼者滅罪除煩悩現世大安楽
臨終住正念ニ此呪を唱へ敬ひて誓
をおもひてとなへ[illegible]一人の又ぬ[illegible]
てすべし

一 誓を返して後[illegible]事
縁をときぬの中に法[illegible]

て読へ[illegible]公経一巻此呪を三返可
唱なり キヤウコウサラニハツリト 七返唱フルセ
上ハ梵天帝釈下ハ四大天王[illegible]諏訪
住合し七返唱て後山の[illegible]
よむなり[illegible]
衣[illegible]

一 人の誓[illegible]大事呪を
唱る之 我の氣[illegible]の方より[illegible]カイシツカト

七返唱となり七日の内にやりくく病?く
へきや其外宰まて不審まてくさめ?し
まいらせく呪を唱へ　呪ニ曰キヤウカウサラニ
ハワタトオ一九とぞへへきひり一段とへ
頌く又百までもへ　こそ?の?り
源りてハ則なかるへ　うふへ?す
天竺十六国ニハ依名字替事
一 摩伽陀国ニてハまてハ?と後?し云

一 契丹国ニテハ満州へと云
一 新羅国ニテハこてうしと云
一 百済国ニテハくちてうしと云
一 唐ニテハ志?そら大鵰（ヤリ／タカ）共云
一 日本にてハ鶴?北?南?就?小?鷂?
百済国より米光吉国へ渡し政頼卿
り傳如此

一 鷹ハ五臓之腑也肝之臓ニ有
腑ヲハ膽ノ腑ト云也心ノ臓ニ有
腑ヲハ小腸ノ腑ト云ク腎ノ臓ニ有
腑ヲハ膀胱ノ腑ト云脾ノ臓ニ有
腑ヲハ胃ノ腑ト云ヒ膀胱ノ腑ト胃ノ腑ト依
不足名五臓三腑其名ハ胃ノ臓ノ膀胱ト云
字ヲ尿リ袋ト読也脾ノ臓ノ胃ト云字ヲ糞共ハ
袋ト読ヘ洗ル毛ハゲナキ故ニ持胸餌消」胸

消テ五臓ヘ出スル也菜ヲ与ル時ハ先下餌
ヲ飼テ上餌ニ菜ヲ最テ可飼餌ト餌ヲ随」
消五臓肥肉ヘ通スル也

一 鷹乃吉相の事
先せく大なるまし骨ハ細しくまし毛ハ蛤貝のこと
くせよ眼ハ半月のごとし觜ハ入る鏡の
ごとくや額ハ広くまし頂ハ丸く胸ハコエ
ヨラ トカヒハクリテ トニフニト 足ヘ背ハ広カレ

後ハ厚カレ膁ハ強カレツハ厚カレ火ウテ
ハ身クイダクホロハ七ツ羽ヲカクセス子ハヒク
カレ指ハハダカレ翅ハ羽茎フトクシテ末ホソ
カレ羽先ハタレコトバヘハ音高クシテ天ヘ
ムケ後ニハ山川ヲ流セ前ニハ小山ヲイダ
ケホウシヤウノ毛ハ鞴ニヨセ乱ヒニ針ヲタテ
ヨ服門ニヒサシヲ出セテキヤウニキヤウ袋ヲ
カケヨ七十二ノ毛ハセツ羽ヲカツセ執糸ハ糸ヲ

乱ニ已ツ毛ハ小石ヲタヽマセヨ肺貯ハ車ヲトラ
セ肺貯ヲケヤヤウト云也

第四十七

一 鷹為見正へも附書状書様乃事
一十番よ鵰二十番に鵰之番鵰四番に為五番に
鵰六番に大鷲七番に五位八番に小鷺九番
兇合虎为毎虎为をもちて一派乃
貴瓶の乃自余の鶴乃為ハ流しの拍

なま之大自然流事あらハ鶴など流之鶴
と流る大合鹿ゐる支鹿ゐるハ一書ニ有之き
ゐり事状ゐるて是人の前ニ披露にゐ大
大の一二ハ同事ニ又異鳥上ハ以へとも鷺
乃鳥ハ異ありハ一書ニ居之さ之但人の鏡ニ
しかし小鴨五位鷺又兎より前ニて也ハ之居鶴
ハ鏡ともに先て出候鷺の事之無別
花ゆゑ一書川二書海二書山之同様ニ同事之

又鶴ニ大鳥なれバ別て流るの鳥ニ候大

一 居鶴より下乃鷺の鳥ゐるハ流ゐる鳥ゐり
とも鶴など先まゐる二書ニて鷺の鳥也
ま之兎なとハ不及是非二也加様の義
能ゞ相傳ありて可有事也

一 鷺を洗取へ是付書札調様乃事

一 鷺一腰（黄鷺大 梅鷺大 青鷺大） 有馬（下雀 同鉄） なとゝ之て
可是付て此段は一也之又一足大一相異大

一 戌亥一張亥書也

一 辰巳乃鷹并附梅鷹おもてハ巳午のごとく
子梅鷹おもてハ南むきに鷹一把鵝鷹
なし 書也 桃花鷹の梅鷹ヲ七本也
白梅鷹乃附ハ鵝鷹ニ立鶴鷹に
巳午ともハ東にて書也 鷹梅の事也

一 鷹を北下より南へおもてへ一文字角
鷹ヲも見鷹を白花をみればハ鷹一双

大きく鷹小笠鷹おもてそ中之国中に
たいかうく亡一せ化玉緒れなしこくを
見て小児ともを附置可調可流しを
寅巳十八

一 大とも立化へ見せ中本の下くし候さ
きをおもしろく古きしのあひ合に一刀中
斗ともしハ九の云さと立本の云さ哉
数多く表も大を左のひさぬきつハ状とて

仁へ向て頭毛へ丸のまゝと人太刀をまくハ
そのまゝさま成りかへ一かへしてそこで太刀
左乃さきの手へこしにもへゝ重くみ
さや乃へ取さ者ハ右へ内にりて一下へ
一 鍔もとも前よりて持ハ如何に引く生て深く成
とたれまゝにれく右のさきをと立右のさき
をさ支へ右の刃さきのきハ小し引そて重太
刀をまそて頭を之へまゝと全てれく深く先とよ

に一かうしこて右て尺と中也で向る時ハ
左へこ八右太の刃ハ取をとり近ゑ之へきしと給
手まとはなのひをと見せ中に手を行引く有之
一 たゝ乃儀る後し大概馬に乗る左右手に
頭を取成右左の手にそて持ちを取りて
頭を取りより上成後にて一し持ち人ハ頭を
とらんと上之し上手下手にもちへ人のみ入り
え後ほて座しさて右の手に取りかけて持る

引縄と渡はかへし

一 拽網裏の事　引縄とかやくして七寸

七すに結ひ折にして八寸あそむへし折

返し先のわさへ縄をとをしてしめ結

めてきつふぬく結ひとめしてゆ縄の

あまりを撚り付る構結ひて長

一 大のもしやうの事　旋かくすへし大鷹

たのさきへあつたかふたもとすへし角へ

一 尾の縄の事　角鷹なとは一丈二尺へ事ほとに

拵へくるへし　其ほかにもつさくを寸へし

一 小鷹たいは一丈二尺の其さきにも其とをちをせて

まゐらせ三四尺なかひらくまへし

一 小縄の寸法ふとさいわまち長さ二尺五寸計

ありなりくさしは大いるは之本縄の

一 本は山椒の木をもて用る

又はうちれ樹は大の所なと楊尾とさをすへし　棰（カルヽ）

一 かねて定へし すまはりては須弥
よりも検見とし奉て先縄を法度へし
めさせられしハ揃て無用にてぬる事を
俄めそ犬の検見より竹の気を付して
喜ともなし

一 須弥縄かけて検見の法ハ縮ハ同之 法度
乃事かきハ 日記ハかりして口伝之

一 繰ありへる犬を見せ一戸挾者のまく
引く出す事も留るはきハ左の請させて
犬をたのみ立之但須弥をさ右の請事
半遠之ハとらつかすて乙ハ縄紙之
とらへ行ハ手をあとの事て須弥をと
らえ驚ハ最よ行ハ犬ハ左よて立之

一 犬をハ事て事とはへしつるさて
とる事るとハ日ふへくハ

一 犬くるを見かりてさしまわる事を付ハ

お犬追ものとしては鷹師のかへしとや
いえをしいはしなへて人をもとめるにいへハ
名ゆ云ありて中つて記なき事

一 犬のえもしらる名をとりてハつきたる
名称としてハうるしいわへきなり

一 犬の称ハかやうに色々とあり云々

一 犬乃毛色考し云ハやせたるものを云之

一 雪しろく犬の足跡をハうつし詠む之
鳥とも同類也

一 犬乃毛色ハ葦黄 黄耳 騅（セイ） 驪（コリ） 有
朱白 黄犬 韓盧（カニロ） 狸足 逸犬 猲（リ） 犲物

一 さうし詠りし云ハ伝りまるまそたのうて詠へ
うむをさうし詠りかれし犬とハかなり

一 犬の中り縄をとり縄として引縄共云之

一 疲竜とも云ハ伝りきた一犬飼 子附の声に責
子みハ是へ今 犬飼も疲へ犬を子附

の声之悲りハ示て也

一 犬の吉凶の見事なりとはつけける

此犬ありてあるなしくわめよ

一 犬逃しし事ハ渡ハ今犬引抜と云也

一 犬のとの避へり手ゆるをきたとをくとも

一 出してさくてをうけしし云なり

一 犬乃山おちと云ハ山より犬の逃る

了手残いめて里ゆるゆいゆへり寸

一 犬とかめ出ハ鳴事にて犬の出而く

追なくそれとやしなしすら時犬腹犬

とかうて役生し貴子元ニハかゆり

一 時ハ犬乃てし法とかさて云なり

一 ありてしもしと云ハ出まりハあるたの時る

と起くるをと追て犬のもし拔と云之

一 竜ひハりめでゆこ同ると云て書そもし

田中り残志りゆ小之同日残いかより

一　こけらひとつハ鶯乃音を捉て鳴
り又鶯ならぬかはして音成
ひとつ成りけるといふなり
一　さゑりたる太成にしまりたるをいふ之
一　彼ハ太と合成る太の胴頭の手先つゝ
音声にして書へし太南音せハ声の
音色よく書へしやまはかきぬるハ彼の声
みちを合へし色鳴并て道くハ息の声にて

切声よき書へし色となかくして又か
音切くりくらう音へ下音起る
一　捉ハ元書きしよくならへし
一　息るとしてハ太の子の親りのとく
なるといふなり
一　太のさしてひといふハ鳥の元書きなれ
とよしなりて律きろ音くゆとは
しり音くゆるといふなり

一はやし立事ハ大乃尾のされと云下
急そと持つくしらハ急れ也乃詠方
をとし覚事かくはのくだの納
と急とつくしてよかゝり

一破たらハ小返りしき破を嘆かた
破へ入ぬハ大たしよれて

一大とハ先染ハ声みゆゆらしし大相音
せいの入声たか入し趣るたのぬへ声ハ序破

急しの入座し初く相音をなる時ハ序
の声をやよしおかしくみゆハ破の声
よそ定よりまハ急の声か也へし急
記ハ急さけひとまりて入し

一急記て追序りしら西へ大とよ子は
まだしよぬ事をしよみゆへ破とりもだ
としくれ祭あまししよく流ハつりき入
なりて流来ハあ揚してハさがしくハなれ名

とらし〳〵　一説ハ又な綱の名字なりと云々
一　たきつともみえしとうすハ大滝川のうへて
けふ大綱のうしろめるあめふりハつなをて
ひしきてしつ鷺跡りな綱をつらぬく
一　はのとしも、さるあつたの事也
一　何ぞなとハいゑハ名のこなれはまつには
のとものぬたのうれく
一　かるつるもしいみる渡をといひも同事

部の入るなとはよみあり
一　名のこなといはるゝ引入初ぬなと云也
一　と有りをしさゆへく〳〵しるると云之
一　法川のほとりと云ハと有つくしのなく
多るまくる語をよまく歌を云く
一　大なるふるもしと云ハ覚ゆしと有ゝ以て
有るを法川の手て歌をよみあり
一　小なる歌もしと云ハいりゆをも志賀のふるきに

しかく〳〵も紙にはいふなり

一 かさねしてハ一本をとりてみしくしも紙之

一 やりかけしてハ柄の方の西へ太刀を入置也

一 太刀をとるしてハ、あしなかしとさうし

様胴附覚書ハ紀元ア書略しく

してをとるとて太刀をとられさすい上之

一 ゑうしんしてハ何刈坊さし候者のうち

こしらへとりてこしてたてゝあるとこゑふ鼻

みゆる事なかるへしといふなり

一 えり鼻してハ草にはるゝを待まして

ある候太刀あしき所のしるし也

持をとるく捨候何の事にて候く

あくるいふをいふなり

一 鳥をかくるハ亭主の役也 但亭主前

不案内なるは太刀山をかけて宿所へ下し

一 鷲を居るに太刀居して其事を前に

飯となり夜りハ忘申す

一 お不乃兄ふかく親しミる物書と同る之

一 物香とに多きしミらうミ習慣のとあり

一 たのかことをさむといふ事ハうこへうるたの名

とろ〇失し前くかくやくうろもとらへかこ

すきこそハ生たすみろひをとしろ物く

た烟ひ内とならきへしおたきさつこつる

にあひの草なりいつまとし大烟てにえ

一 た烟とた葉たハ大事しことしいはるなり

一 ときわるる大の色の寸法ハ大の熱ものに

なへて切なり

一 色かくりみてみえしまハた為色あ寸法ハ

六尺に見へし者ふハ一丈二尺なり

一 といふことハ大の事やうなりハ

たのとひ葉と讀申

第四十九

一隋魏彦除鷹賦雌則射大雄則双歩謂

一乎旦将獲其雛不知其斗

一大内鷹曹司数聯良鷹繫数牙逸犬飼

一鳩鷹離変三番眼鹿馬易蔵二十世一心

一月令鷲摯之白鷹化為鳩七日鳩化為

一鷹尓雅鷹鶆鳩郭璞注鶆當為鷞鷹志

一歳為黄鷹二歳為撫鷹三歳為青鷹

一翅疊越山雪瓜磨呉地霜一呼鞲未下

先忘欲飛揚

為

一崔佚為御史語曰在南雉在北為鷹

一快鷹不卧兎一鷙鳥累百不如一鶚

弟

一國俗訓兄鷹為小訓弟鷹為弟

兄

一爪鷹瑶光精気蓄鍾代山層巣生

蒼蝿

一背如常上九秋鶻今似三十前十月蝿

詩

一崔鉉鷹諸公万里碧宵終一到未知誰

是解條人

一 章孝標鷹詩云向人啄斷碧絲條

一 青鷹鞲下未秋半

一 青骹摯拎鞲下韓盧噬拎綺未 左文選

一 飢鷹得一呼　一 飢鷹仅下肉棄

一 陸佃カ云一歳曰黄鷹二歳曰鴘鷹次赤 桃花鷹云

也鴘披免切三歳曰鶬鷹又三歳青鷹

共

一 鏡曇集曰鵰矢鷹云鵰ニ似タル鷹ヲ云ト一説曰

又一説ニ百舌尾ノ鷹ヲ曰也

一 廣志ニ一歳為黄鷹二歳為撫鷹三歳為

青鷹一

一 尓雅鷹鶆鳩郭璞注鶆鳩為鷹

一 韻會曰鷹隼二歳色赤ヲ曰鴘

一 陸佃云三歳曰鶬鷹今通謂之角鷹頂

有毛角九待夾鵰頂ニ鷹也

第一

一 鷹師鷹飼大事ハ大進青子走見

肋執揮判渡ニ走黄子記黄子

口伝二 鷹一翼ト云数字之事

一 脚一足一尻一架一枷一翼一件

口伝之鷹毛釋名ノ字之事

一 羅綾鷹 莫鷹 黄鴟（ハラコモリトヨムル） 接鷹 白接鷹 白

ヽ接鷹

一 鵃鷹ヲ云 二歳 青鷹ヲ云 三歳 鵃鷹ヲ云 三歳 山廻ノ接

鷹ノ将ニ云 黄ハ山廻 白接鷹ニ云 遠山廻ヲ云 三歳ヲ云

一 鵃 山ガヘリト云 是ヲ七妻也 ニテ 播鷹 荒鷹

口伝 口鷹 大小ト云ニ 名之字之吏

一 角鷹 兄鷹 弟鷹 嫡鷹 隼ニ フウカウノハトテ云ハ 隼ニアキル事

一ノ羽ノ名ナリト云之

一 兄鷹 男鷹 棲

一 鶻（ハヤブサ） 鴟 隼 祝鳩 異名 晨風 上句 弟鷹 兄鷹 鷂鷹

一 隼（シユン）日

一 鷙 鶚 神鳥 鸇 鵰 鵂 鷓（コリ）

一 鸕 鷹 鷹 兄鷂 小男鷂 児鷂 赤 金鈍 異
名之 鴘（コタカ）

一 差隼 青鵅（サシハ） 刺羽 鷂（ハシタカ） 雀隼 次雲（ツツウン） 児（シ） 異名ナリ

一 鶺（ツリミ ミヤウ） 鴯 鵃（ツクミ チヤウ） 雀鷹 判羽

一 鴿 菩提 落客 鳥

一 木子（ハコ）（マ） 水月（ハミ タカ） 胎卵（ク） 熱鷙 紫鷹 莞 三ホノ異名ハ紫ノ花トヨメリ

一 鶯穂 桃生 桃花鷙 蒼鷙 碧・鵅

青蒼鷙 赤蒼鷙 雪蒼鷙 韓巻

蒴蓖（セニリ イナコ） 蒼（サツ シロ） 螺蒼鷹 霞輪蒼鷹 黒蒼

鷹 吏相鷙

一 赤山黒生 赤山白生 黄黒生 斑生

鳩生 大黒生 小黒生 藤生 鴫生

紅葉生 乱生 丸生 桜生 赤生

大眉白 小眉白 書画

一

一 鷂鷹　野鷂　野鷂　山鷂　乙女鷹

小鷂（コヤマカヘリ）

第五鷂 捋之類字之事

一 捋　蒐（春）　畋（夏）　獮（秋）　又 狩（春）　推（冬）　宿山

當中ニハ此字之　𢮦山（ワスレカリ此字之）　泊山　狩川アル下ヘハ此字　宿鳥

网　羅网（ニワツロ）　忌网　罠网　罤网　下狩

業苑　業苗　勢贄（マニ）　狩篭　業捉声

鳥吽（トサケヒ）

一 業打篭　処聲　渡篭（ツカシ）　切声（キリ）　遣聲（ヤリ）

一 惣捻　起栖　試兔（マコロミテコルス）　鳥起　鳥捉

揚上（スヘル）　求（アサル）　喰鳥（ハリ）　庭拳（コリル）　鳥捉　捕

鳥格　園　囲　渡（カニ）　ヤスルトヨム之

亦六鷂（タカツヘ）之類之字

一 忌餌　忘餌　拍餌（ツヘキ）　正目餌　拳

越餌　再撒餌　洗餌　板目餌　桜

餌　切餌　押餌（コサヘ）　鴫餌　碁石餌

流𩿧　鷂

第七鷹之道具ノ字

一　絛　平絛　江絛　足名　哲之袋　繫　鈴　火拾　韝　韘

千貫　御緒　韋、　鞢　鞭　鉤緒　元

助　旋子　天助　靫　雀馬　楽　助網

袋　鈴　鑾　鈴子　鑾　舄　将杖

青子　草　水筒　虎　縄　綸　閑　絲　閑、絲　鞴

一　袷　韋　縫　韋　紙　絲　板　絲　安　一　經

絲　纏　韋　尾　韝　餌筒　餌袋　榁　衣

架　布　編衣　打　絆　鍵、　鎖　竹　捲　小槌　絲

第八鷹ノ羽毛字

一　尾　魁　多助　背　待尾　鳴羽　石打

黒ノ　絲　月　絲　色　絲　羽　力尾

穀尾　揚尾　尾　汁　大尾　飛尾　小

尾　飛尾　鶴尾　尾　右　鵄尾

一　七ツ羽　母衣　餌　袋　毛

一　𩿧　隠毛

一 鵃毛 翡翠毛 乱須早 熟毛 頓
須毛 挟衣毛（サコロモ） 三重 甑（カニ） 雨覆（アマ） 許押
毛 許苑毛 剥（コキ）毛 堆毛 乱急
一 押毛 尾動 呉服毛 雅毛 臆（ホロ）
一 上毛（ニヤウノ） 樊羽（ヒラ） 羽節濟 羽次果 梅花
毛 五月毛 鶖毛 青雨毛
栖毛 山志毛 松原毛 遠山毛（ホロ ツノハ）
間毛ヲ残スヲ云 桂鷲 附黄鷲ノ毛 鞄花（ヒミヤウ） 糊（ノリ）毛

一 決拾
弓九鷹之捕取ノ字
一 懸爪 打爪 鳥居 障子 都濟
徒前（ヌクサキ） 身寄 羽莖 頓須 青葡
背根 胸 餌持 股 脚對 眼門
眦門 目庇 山下 呀門 頭（ヨトガイ） 小
辟 指 鏗袋 小頭 頭 眼 翮翎
脛 胃（ツブロ） 腦 檪（マヒサシ チラヲ云） 挽渡（ワタシ） 貝（カイ）釼

时(ヒヂ)睢(ヒリ)(スイツ)揩(カイ)完(シ)肌 翼(ハカイ)八子 末(アサ)
劊(カイナス)指ヘ 比(ヒ)骨(ホ子)脛 眉 頂(イタヾキ)

第十應詞之字

條 解 翥(スモウ)曦(子タナキ)繫(ツナグ)嫗(ツヾロ)検 癖(クセ)
竹(エ)据(ナキ)噬(ヤム)(カミクラウフ)咋(サクフ)翔(カケル)(アルマフ)嗜(タケル)澤(カスル)毛 刷(カイツクロフ)
凋(チウシ)(ミヲフ)鍏(キタイ)浩(アヘ)劫(ス)奪懐 一挟一竿 呼(ヨフ)(ゴハウ)
雑(シ)摸(モ)摸 易(ロスシ)雑耳 平(イナモツ)(モノカス)逸物 諾(ウチコフ)
匕(スクフ)鸞 押(ナル)剔 卸 破 捕 捉

索(ス)手盈(テアルケ)奪 賦云 釓(ツカル)育(ヤシナフ)粮 銅 叅(ナブル)(カタキ)(ヨロカ)撑(アラタムル)(クウ)
嗔(ミン)愆(アヤマチ)(アナウル)行 打(アボル)(フセク)膺(イキリ)躭(タノシム)(フケル)(シタフ)(タノ)廬(イボリ)(カセ)(クラ)鼽(ハナヨリチタリ)(ハナタチ)(サノ)鼽(ハナイーキ)(カウ)跣(スアミ)(セニ)(ヒク)
踘(ハシル)走(トウ)哺(フクム)(ホ)覿(カク)(ミラ)驍(ホユル)(ナウ)(トシ)(イサム)修(ホコル)肴 吹(ヨム)扁(リン)
写(ウツス)奨(ホムル)務(シャウツル)募 瓶(トヒハシル)手掩(タヲイ)揺(ウゴクスツハサ)翅 傴(アチヅル)助(ホミシ)(カタムウホ子)
胞(ホシ)盲(コウアヘテ)(ウチ)睇(ヒラム)(テイ)炪(スボル)(ラス)(アイ)炫(キラメク)(ケン)臭(ス)(タイ)斜(ムシル)(アサク)挨(フス)(サック)(アイ)擴(ヒロク)(トル)(セキ)
搦(イツク)(ヘイ)蘇(ヨミガヘル)(イヌル)(ソノ)賄(イル)畏(シハイー)(カシク)遡(フム)咀(カム)(ソ)嗖(カム)(サウ)咬(フム)(セウ)吻(フム)吞(ロ)
嘹(ツハキ)(ダ)呵(シカル)叱(イサム)(シカル)(シワ)娥(キャウ)(カ)嫁(トツク)娟(シラウトメ)(アイ)姹(ホコル)(ソノ)(コク)(ヨハウ)衿(ツル)(エリ)(キン)折(タミリ)(ヨル)(セツ)
䩹(カナキリ)斛(イル)薄(セメキハマル)(アツム)(ワスシ)葛(カウラ)(カフ)(クス)罵(ロナ)(チ)畓 蘇(ヨミガヘル)(サ)(ヨサム)(ソノ)

峑 巓 峯 谷 難 維 帰 駒
言 耳 連 搗 拔 提 怪 扶 錦 沼
刖 犫 噉 食 銛 怗 轉 士 羽 啗 瘠
囚 揹 拔 鈴 乞 鎬 貪 倿 幸 神
押 奪 矢 放 居 木 木 居 小 茉 權 茉
猫 鈎 樟 斛 炎 十 拾 書 冠 木 衡 搭 夜 宕
取 廻 翔 譱 相 一 鍒 朿 餧 火 置 奪
奉 馴 鳥 紀 奪 懷

第十一 鷹 与生類ノ字合虎鳥同虎
鳥两虎鳥

一
白鳥 鵠 鴿 倉 雉 雄 雌 鴈 鶴 真鶴
雛 禽 鸐 鷺 青鷺 鴻 鴨 鶇 白鵜 鶴
鶴 神鳥 蝬子 雀 鶵 五倍 丹頂鶴
鵤 鶍 鶯 鸐 鶏 鸞 鳶 鴟 鵟 鵞 鷲
鵑 鵯 蓮雀 鶇 薫 嶋 鵰 水鷄 鸐
山雞 山雀 梟 鵬 鵂 鷗 鵼 綿蠻

一 鶚(ミツサニサイ)鶹鶡(月) 鴾(ミサコ) 鵐(シトト) 鳴(ヒシクイ) 菱食(月) 鴇(ヒハ) 鵯(ヒヨドリ) 鷂(ヒタカ)

鵯(ヒヨトリ) 伯労(モス) 鵙(月) 百舌鳥(月) 鶺鴒(セキレイ) 䳄(ムクドリ) 䳄(マシウフ アサムク)

引(ヒキ) 㒸鳥(ノコシ) 餌(エ) 柄鳥(カラ) 鴐鵞(アトリ) 秋沙(アキサ) 阿専ナリ 和哥詠之

一 黒(クロ) 駁(マダラ ブチ) 提(イヌ テイ) 犬(月) 犬(ケシ) 鷹(タカイス 月) 捡 犬一牙 玄(ゲン) 黄(タハウ)

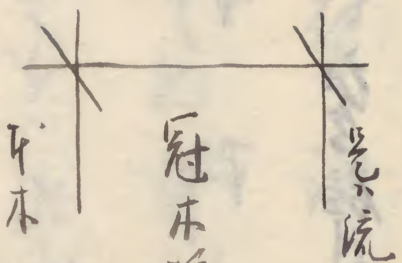
黄耳 兎 狸 猿 猪 鹿

一 鼹(ハナヒル テイ) 鼠(カク) 蚯(ミミズ キウ) 螺(ホラカイ) 鴉(月) 惇(アメウシ) 悖(月) 羚(カモシ レイ)

蚵(ミミス イン) 虱(シラミ) 緑(リヨク) 毛亀(モウノカメ) 蚖(マムシ) 蛭(ヒル チツ) 蚤(月)

蟎(タマ) 蜱(月) 蚰(ウリロモチ) 蜻(トン) 蜓(ホウ)

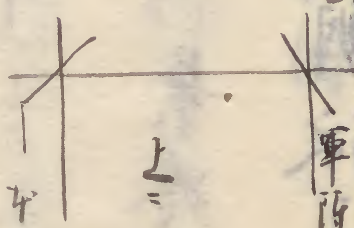
一 流レ紫 法 花



冠木 ヨリウラニ

ダ木

一 軍陣ノ紫ノ法 ありく



上ニ日冠木 ウラニスル

ダ木

一 第十二國ノ名

一 鬼界 高麗 契丹国 新羅国 百済

一 也 唐土

一 鶴乃 毛 ひ 沼 鷺 小 月 し 上 の 而 り

之 川 か 旅 や

一 いつれにしてもこゑの鶯のよくなくは
たるをいふと云
一 人をまちてうらむるこゑをわりなく鶯と
よそへ給く鶯乃なりうち給ふよ
一 ふるすのいましとは権なり 大云 又按
いふこそいよみなり
一 白新 聊鶯来 景冷閑
一 平生鶯聲きゝむ 朝詠まいり

鶯詞 次第不同
ふる物古物、山国おか声、うちら鶯、ゝまへゝ
なると云ふるゝつかはるゝちらる、一より、二より
むかし飼ゐ、初より、りやうきいにとられ、
こかりいまゝと託し来こうとまさる、さう躰
先くおこえみまと合すか誂託みかくつ入、
よぶる、打わつる、やむるせめま入いひ合せ、
一 死なしふ、あらぬ、追こさる、ねしゆか、はる残。

うつるおちは月しおくみかくり、木ふかる、
紅葉かくりぬしくらけるうくかねさ露つゆ
かくれ、名所、秋の野いてげ、なみをかへ、
一住の書、二は露、とりゆふべ、草をとる、草
虫入草ありかりつかくに咲んなとる
すだくとし虫など鳴く、風の縄にしても、
しるしくるいそのは此かし、色句ふ宮ひけい
しきむ草をとるる、おのけぬ鳴きけり、

つらき色は、そらしきれ、みかうしほにかつらぎ月
うもてむしまくらつる、さうしても紅葉夕あり
露をとりて、露をぬらし、ある露をとらる、
手し色アリ、武ちかりに、たまれの下、一葉椎
草木しそうぞらいこ居かくる、紅葉にゐかる、だか
めくらひる月、わかりの降しなし、ゆき
ざくる露羽昔いつ遊こしひ、ゆくに身
たしてとしくる、あつさんへし花、おのれ花しはら、
より

合かしらのまたし廿八の手く廿八とさだめみちて
様々名様にてそつちよん、染をつらく
わかる、恋としける、恋高き、返し鶯、恋す
けるしゆ声かしる、さへとちらしき中、とるそしては
あおとすおよすり声にて大のしらそつしる
重ねまて是、としへ〔草なれひ草、もつむ草
けて夜是出むこしろ、しめる、愛鳥けふも
ある、是ぬたくさし川めつるわけか、ぬけそしたれ

う手気ひ、草にて鶯、中音、せこ音、くどい
色の〔声、つよき声、脈とえ、提りくる、由ずそ、
ぐい、あそれがい、おすりひがい、夜かいこそせたりし
つる、ふくあつる婦く切おくなしぬ、御かくるぬ
こおそしりくる頭、合かしら、手てまくらいつく
切る、はさしとろめ、中ういて志てきい、きもりぬ
まし鶯つき沢まり合、一かくり、おんなじ
そひおもする、うつて、まちまされいそしやぐる、

あそびこまかすかさしの足をはなちて、さまでて
せざりしかば、かつていきいざさず、こまかにい
しず、葉、驚、年葉、驚、葉まくり、葉しろ
まつ葉ぐしら、葉下、葉あしくいりしまちけ
まゆり足かて山こいりて山こ絵波乃
ねいるけいりぬらしせず、かるうて為くり、
おくえりいそ地をひしくかけるをまる
無みる元すりぬ婦るかひろしもどり元る

鞠をおもとしちぬともまた縄鹿縄婦
開該鞠もんこともさいもんしもこのもく
てあり所いあひのあたとをさしとるを
色と内色と鹿をうけする鞠がなら
まへ空んとあらめんし 一言 二言 鞦驚まみ
色々の鞦二驚 鞦子鞦かくしもすへる
おなせり枝せりとすりつ杖之派之
おまりまるの驚流へせいの驚をめり

乃路ころもの路亦しや百とゝやとかり
とりふしとけきつしれもれもうし宿とい
と国路の字泊山　海川を西へ流るゝ　多葉の雨に
しも山入山ちゝ山ちゝ山とゝ人山とゝあ
云の葉にやすれ歌の花の涙の字にまたけよ
しきりにしかゝものちゝりし新もの新詠く
雅乃言の字とて詠の花葉ましくり
詠の志とく云ころ相山ともれやさとくり

葉づき　自頭歌贊歌贊掲されて歌
志つ歌て歌詠歌きりしとうまい当と
むまし人とちとひくむしれねこうがきに多袋
がい帰るとしそし人隣松京のそし遠山も
冷なり路宿ないもよ高曽中乃流師守
跡もれ（トリカヒ ミアリ）色ろの葉ふしりも人の数
氣もし歌まもり心守はしるつまもし
くる御ことふ物河あひて後ふやしふ歌

菊作めの蕾り化しも年作りやしくもまき　とき
ざひらくかゝ儀除きより猶若作枝作
しき論りかりかくあゆき寿しのみえ只の
あうゞり咲きり業角作き入床のうけ　詞よともむ
あうけるの花入れし草地髭若ひとしろ相
うむりいのらずりうんなのそゝ川あすめら
いうしきは相ろわがなる急川がらえと我和手
とえろゞくおりきやきふんの足ぞけをんだ

まいらする論りきこりせんなぶ相そ
もうちさ作れわ年いともこぶこりらき
かゝ中乃りそしくる将そ免ん有す
け鶯いろきあり大しあしいぬをえ乃礼
山ありきあり蔵かんそんりんみしき
尾りあきをきやらなでり多岩でり内
寄和しらやのゑし梅乃花そかりひらそし
鶴もそ鶯そ急つ年むし松見皆おしけ尾

耶尾大金耶尾志ゝしたわよ道人拳
尾志乃尾志甲尾志な母上日志ゝし
ともこゝしたいせいたおそづちたんさい
あはき宗里志ゝしむ多と良 よ
とめかんどりすぬほ行ら乃かど
もいよ事いわ利

養奮記

吾聞之周易中一学彖曰豚魚吉信及豚魚也王輔嗣曰魚者虫之潜穏者也豚者獣之微賤者也爭競之道不興中信之徳淳著則雖微隠之物信皆及之盖儒教之及物信莫大乎吾釈氏之道亦是従信入焉毒記以降搖虎以馴此帰吾仁也鸜鵒之誦経鸜鵒之念佛此敬吾法也信之相感無所不至越之

曰下氏朝倉教景出于将種以武為仕此辺諸
将無出右者仁愛之博忠信之敦海深春
育吾無間然至若訟庭毎夏一室莱然拈吾
石碩徳英衲富確祖佛梲縁不立文字而好
字禅矣　近歳得一双鷹而養之粮而愛之一
雙大与小也国俗訓兄鷹為小訓第鷹為大
隋魏彦深鷹賦雌則射大雄則形少謂千旦
将獲其雛不知其計未牟之何鷹之営巣唯

在山林岩巌不在據止路市鄽何況公暑宮
府乎於是教景意匠経営密運化梲於寝室
傍挿枯木可巣者一両株横縦其枝自然得
鷹易栖息鷹初怪而不近之後押而不疑之
雌雄相依倚立其上朝来暮往拮据捋巣巳
既成矣　卵之翼之遂育二雛々々長則非常
種族国人相聚而賀曰此則日下氏一門瑞
也諸孫相継刷羽儀於天朝拭目以待尋宗

族霜臺孝景請其一畜養所謂大也支達京
師人皆為奇支教景亦竊謂不可私有孚篭其
一献細川右京兆所謂小也京尹臂之出示
攝薦心雉沙雁膽墜股栗百発百中未曾失
一回俊逸不群也去歳冬之仲凜若霜晨野
草半枯群禽無地竄身相公率京尹而于田
京尹幕下高材疾足者不憚崎嶇雲毛電走
打囲四郊京尹放此鷹則擭身入雲歛翼掠

地宿鳥驚而起如脱葉随秋風鷹即追此到
台座前風毛雨血一朝而獲五禽相公絶嘆
龍春信恒京尹之喜見於肩申之間所善何
哉彼雖不離羽群克守其義有撃強獻捷之
勢不減忠臣烈士之恥為鳥犀相公握兵権
氣空賊壘天下英雄尽入彀中従此而始矣
孝景所養亦俊逸也搏撃之能越人所知故
不毛塁近日孝景献相公必待春暖試其能

千右曰物無両大吾不信乎今双鷹之有奇
材異自教景心術養賢之徳及於羽族以故
鷹之与人相謀不労指揮縦心所欲然何
能若此哉教景平居与人交而有信吾信及
物故親戚信而睦于上黎民信而和于下一
邑信而化一郷一郷信而治一郡一郡信而
安一国信之著者天之所感宜非聖人中孚
之象哉凡鷹之用於中華權輿于少昊金天

民々以鳥名宮以爽鳩氏為司寇爽鳩
亦為鷹見於礼記月令篇自周楚文王唐太
宗玄宗等諸王養以玩之但不作禽荒而已
人臣之愛不可勝計吾日本国王萬機之暇
維鷹維愛過於中華仁徳天皇四十六年百
済国発使者献鷹犬於吾国海舶到越州敦
賀津養鷹有日米光養犬者曰神光其犬黒
駮也政頼奉勅赴敦賀迓使者休吾国尚未

精十指呼之術政頼就米花学而習焉既而
辟鷹犛大以飯帝都天皇賞之以賜釆邑至
今以指呼為業者皆傳自政頼然政頼之孫
不聞于世焉可惜焉歟後桓武天皇専愛鷹
於南殿帳中身親臂之嵯峨天皇弘仁二年
以彩修鷹經施行海内傳寛平盛于延喜天
暦勅與一条白河院北方所以暖攏之不可
癈也今吾教景知鄭賀而将得此鷹米光年

政頼平僮有太史而書敎音則孝景与彼二
子載名同傳也耶昔吾佛説本文痛竹調鷹
方法白蓮与減師曰左家不制出家悉断雖
然鐘山宝公産鷹巣中千足皆鳥爪也異日
宝公劈破面門則現十二首白蓮大士鷹与
大士豈有二身吾朝行基亦殘時人得之於
鷹巣天下不名呼曰菩薩逢寺刻佛則平峻
路其功不在宝公下又投子吾乃青鷹也會

聖岩前飛入浮心多作洞書鷹膠由是之觀之
吾学佛徒談調鷹法未為破戒乎柴屋長公
曾為教景座客而熟於此鷹故為教景需記
其顛末予不辞而書觀者圖之

天保十一庚子年寫藏

墨阪十一代主寫藏記

国立公文書館
National Archives of Japan